<研究ノート>

幼な子と共に歩みつづけて

―夕やけこやけ―

石　原　喜代子

―はじめに―

保育者としての道を長く歩みつづけてきた私でありますが、現在、養成校として偉大な歴史を有する本学にて、保育者へのスタート地点に立つ学生たちをいとおしく受け入れながら、学ぶことと教えることの表裏一体を実感しております。

本年度をもって専任の任期を終えますので改めて我が歩みをかえりみて、幼児を中心にした触れ合いの場でのさまざまな感動や、保育者として心に大切に温めつづけてきた事柄など、たぐりながら綴ってみてはと気づかされました。しかし、何分にも気づきがおそすぎた上に、ささやかな経験をしかも、大まかな表現しかできないと思いますが、本学を愛するOBの一人として共に学び合うことのできた喜びを、あつい感謝をこめてでき得る限り記してみたいと考えました。

―はじめのいーっぽ―

本学卒業（1947年）と同時に私は、一宮の聖公会の教会の幼稚園に赴任いたしました。

そこは第二次世界大戦中、空襲の爆撃を受け、そのとき町の中心を舐めつくした戦火が、教会と幼稚園の隣家まで類焼し、奇跡的に焼け残ったものとのことで建物の傷みは大へんひどいものでした。

町の目抜き通りの下手に面した教会は1910年（明治43年）12月建立され、当時の装いは町民の目を見張る美しい洋館で、威風堂々としたものであったと言い伝えられておりました。

幼稚園の方は1930年（昭和5年）4月教会の建物に付けて建てられた遊戯室のみでありましたが、本学のノラ・ボーマン校長が園長兼任で開園されたものであります。

（教会・幼稚園共に1960年（昭和32年）現在地、古金町に移転）

当然、一宮では初の幼稚園でありました。以来、現在に至っておりますが、昭和26年まで市内唯一の幼稚園として大きな役割を果してきたといえます。

戦火の傷跡を改装また改装の付け足し設備でしたが、地域とのつながりは非常に強く親密なものがありました。キリスト教という特異な場であるにもかかわらず、地域の人々から愛され信頼されていることが身近かによく感じられました。

初代からの宣教師、牧師およびそのご家族や園関係の先生方のすばらしいお働きと、温かい人間関係の姿勢の中に絶えず、地域の人々を愛し受け入れられた結果の賜物であることは明らかでありますが、「人を育てる」という役割をもつ保育施設の在り方は、その地域に根ざし、その地域を愛し愛される信頼の交流がいかに重要であることかを痛感いたしました。

「愛されることより愛することを」と教えられた聖フランシスを想いながら、ゆるぎない信念のもと愛の保育実践であることが不可欠と知らされました。先ず、はじめの一歩の初心に重量感のある大切な一事を学んだ私でありました。

－もういいかい、まあだだよ－

私の保育の歩みは幼児と共に、又その母親と共に過してまいりました。子どもの年齢が低ければ低いほど母親とは切り離せない深いつながりがありますので、お母さん方との触れ合いは殊の外大事にしてまいりました。

しかし、駆け出しの頃は当然のことながら、お母さん方のすべては人生の先輩であって、年齢的にも社会経験の上からも重みが強く感じられました。そこで、その頃の私は唯ひたすら、子どものすばらしさと、保育者としての私自身の喜びのみを母親に伝えつづけておりました。

（このことは、今でも保育者の姿勢として大切なことと考えますが……。）

当時のこの新前の未熟な保育者に対して、その頃のお母さん方は「先生、よろしくお願いします。」「おまかせします。」の姿勢で、礼をつくして信頼してくださったのには驚かされました。申訳けないような気持ちで新参の私は考えました。そして、「お母さん方の信頼にお応えしなければ…。精一杯勉強をして楽しく温かい実践ができますように…。」との思いを強くしたものでした。

母親の想いは即、子どもに通じます。母親が信頼する保育者に対して子どもは、当然安心して信頼し、身をゆだねてまいります。

保育者は先ず、子どもとの信頼関係をもつことが先決と言われます。確かにその通りで

ありますが、信頼を得るということは責任を伴うものです。考えてみますと、大人でも子どもでも信頼度の深い対象から受ける影響は非常に大きいものです。まして乳幼児は善悪の判断もなくすべてを模倣します。幼児の遊ぶ幼稚園ごっこで先生役の幼児が担任の先生の日頃の言葉遣いから、近眼で遠くを見る時の眼を細める仕草までを、悪びれることもなく明るくのびのびと模倣をしていた、という事例はそのことをよく表しています。

駆け出しの頃の私は、只、お母さん方の信頼にお応えしなければの思いでしたがそれは結果的には「お母さん方が私を保育者として育てて下さった」と今でも心に強く感じております。

保育者の道はもうこれでいい、完璧というものではなく、常に謙虚に学ぶ態度から人間としての成長を求めつづけるものでありたいと思います。

保育者は、失敗を決して子どもの所為にしてはならない。

まだまだ、未熟さあらわな私でありますが自分で考え、自分で選択し、自分で行動し、自分で責任をもてる人格を目ざして、人生の今を「夕映えの心」をもって歩みつづけていきたいものと望んでいます。

－おされて泣くな－

私の保育実践の場を振り返ってみますと、それは、一貫して幼な子たちの「瞳の輝き」を望み求めつづけてきたものではなかったかと思っております。

私の赴任した一宮は当時、毛織物の繊維産業の華やかな景気のよい時代でありました。ご商売はそれはそれは大へん活気がありました。「どうじゃあ、儲かりゃあすか」のご挨拶で始まるような地域でありました。

就職一年目の秋「勤労感謝」の祝日を前にして（教会は収穫感謝の日として神に感謝を捧げます。）若い私は、これこそ正論とばかり園児たちに次のような話をいたしました。「勤労感謝のお祝の日はね、いつも一所懸命働いていて下さる人たちに「ありがとう」「ご苦労さまです」と言ったり又、思ったりする日なの。たくさんの人がいろいろなところで働いていて下さるので安心ね。電気も水道もいつも使えるし、お医者さんも、お巡りさんも働いてて守っていて下さるしね。夜も寝ないで働いている人もいるんですって。ほんとうにご苦労さまね。でも、若し、その人たちが働いてくださらなかったら、みんな困っちゃうわよね」

と、その時、４歳の男の子が口をとがらせながらすかさず言いました。

「ソォーンナコトシタラ、モウカランギャア。」答える言葉が見つけられませんでした。“働いて儲ける”“お互い働き合って快く生きる”大事な人の生きる姿勢について、一年

目の駆け出しの私は見事に4歳の子どもに叱られ教えられたのであります。
以後、保育の場では輝く子どもたちに気付かされ教えられつづけて、育ち合ってきた歩みであったと思っています。

－おにさんこちら、手のなるほうへ－

「アノネ、ママ、ボクネ、ドウシテウマレテキタカ、シッテル？ ボクネ、ママニ会イタクテ、ウマレテキタンダヨ。」3歳の田中大輔くんのこの言葉は、新聞や雑誌にも紹介され、子どもの素直なあどけなさとその非合理性に微笑みをもって感動したことは記憶に新しく焼きついております。
私の園生活で触れた子どもたちの中にも、「アノネ、先生、ハジメテ飛行機ニ乗ッタノ。雲ノ上ニイッタノデ、神サマニ会エルトオモッテ、イッショウケンメイ窓カラ探シタケレド会エナカッタノ。」いかにも残念そうな表情での言葉。
この地方ではめずらしく雪の積もった日の朝、3歳の男の子数人がベランダに並び、じいーと園庭の雪を見つめていたが、やがて一人が「コノ雪、溶ケタラ牛乳ニナルンダヨ。」大まじめにみんな首を縦に振ってうなずきました。しばらくして、「イッパイ、イッパイ、ノンヂャウ、ウフフ。」「ノンヂャウ、アハハ。」みんな手を口にあて大笑いする様子。
また、花壇に石を並べながら「オ花見セテアゲテルノ」の3歳の女の子。
あるとき、4歳の男の子は、私を呼びとめこんなことを言いました。
「センセイ、アノネ、イエスサマノ大好キナオ友ダチノ弘法サマシッテル？」私、「ううん、知ってる。」「弘法サマノオマイリハネ、トテモムツカシインダヨネェ。ナムダイシヘンジョウコンゴウッテ言ウンダヨ。何ベンモナンベンモ早ク言ウンダヨ。」と無心に瞳を輝かせながら一気に語りつづけました。
これには完全に脱帽でした。教えられました。大きな気付きを得ることができました。これらの子どもたちに出会う都度、「この子らは世界の光」と思わずにはいられない大きな感動を覚え「共に育ち合う」ことを身にしみて強く感じました。

－通りゃんせ－

同一の幼稚園に長年関わっていますと知らぬ間に幼児期を共に過した園児が父親や母親になって、我が子を入園させたいと申し出たりしてひさびさのうれしい対面となることがめずらしくありません。
そのたびに幼い頃の面影を残しながらも立派になられた、かつての園児をまぶしく見つ

めながら喜びを味わうことが常でありました。又、現在、祖父母になられている昔のご父兄は私を旧姓で呼ばないと気がすまないと「ごめんなさいね。」とおっしゃりながら旧姓で接してくださり、子育てに必死だった頃の思いなどを話され、なつかしさと共に歳月の厚みなどを確め合ったりいたしました。

そんななかにも卒園したお父さんやお母さん方の園生活での、幼な心に焼きついている事柄などを心を許して語ってくださることは、私共保育者にとっては大へん貴重なものであると同時に何ともうれしいことでありました。

フレーベルの建築恩物（オンブツ）の第５、第６を最後に自由組立てをして展示してもらったことや、卒園間近かに四つ切り画用紙に園長先生を描こうといろいろ口実をつけては何度も面白がって園長室を覗きに行ったこと。入園当初に泣いていたこと。家が近いのでいつ逃げ帰ろうかと思いつづけていたことなど果しなく、それぞれに想いはなつかしさと喜びに満ちていました。

只、誰にも共通して言えることは園生活のなかでのおもらしをしたときの不安感です。それは鮮明に焼きついているようでした。言えずに我慢している時から流れ出てしまった最高の不安の時まで、子どもは必死に保育者に助けを求める何らかのサインを出しつづけていることは確かなのです。その時の保育者の対応によっては人の温もりに気づいたり信頼度を深める絶好チャンスともなります。保育者の温かい対応は大きな不安感からの開放と、大きな安堵感となって快の体験となるのです。

「あの時のホッとしたうれしさは生涯きっと、忘れることはないでしょう。こんな世話をしてもらったのは未だに、母親と先生だけです。」と、卒園生である父親の一人は童顔の残る笑みをいっぱいにして結んでいました。

「ぼくがおもらしをしてしまった時は戦時中で、園には着替えの備品もなく、園長先生のお子さんのを借りてきてくれた先生は、『これで我慢してね』と微笑まれたあの時の安堵感と温もりのうれしさは、忘れることはないでしょう。」と語る父親は心の故郷を想いめぐらしているような穏やかな表情でありました。

マイナス場面をプラスに切り替えられる力量を持った保育者でありたいものです。

－花いちもんめ－

第二次世界大戦中の園児であったというある父親は、「当時のこの幼稚園は市からの食糧の配給を受けたり園側が買い出しの苦労をしながら食糧を集め、乏しいながら給食を実施していましたので、園の給食はとても楽しみなものでした。」と前おきをした後、「その頃、園には椅子などは無く座蒲団を使って正座の保育でした。したがって給食も正座で頂

きました。」と説明され、つづけて次のような話を聞かせてくれました。

「あるとき正座で給食の折、給食の中にあった肉の脂身のかたまりがどうしても飲みこめず、思い余って口からポロリと吐き出しましたところ、自分の座蒲団の前に落ちました。見るのも嫌で人差し指の先きで弾きました。脂身はコロコロと音もなく、前へ転って視界から消えました。ホッとしたのも束の間で、たまたま前を通りかかった先生は自分の向い側で無心に食べている女の子の座蒲団の前にある脂身に目を止められ、女の子に注意をされました。女の子の必死の否定より先生の先入観の方が勝り、厳しい注意に女の子は泣いてしまいました。泣きじゃくる女の子を見つめながら遂に言い出すことができなくて…以来、今でもそのときの女の子の泣きじゃくる姿が忘れられません。同時に人の所為にすることはしてはならないと心に誓いつづけてきました。」この話をされた父親の瞳の澄んで美しく輝いていたことは今でも私の心に強く刻みこまれております。心を傷つけられやすい子どもへ一方的先入観で決めつける教師主導タイプへの警告とも感じられました。

―あがり目・さがり目―

人は、人間の子どもとして生まれても必ず人間として育つとは限らず、狼少年・少女にもなり得る資質を持っております。

天使のような澄んだ清らかさを感じさせる幼児の世界にも、動物的に弱肉強食の様相を見せる自己中心的な争いも見られる場があります。それは、天使にも悪魔にもなり得る要素を持つということであると思います。

このことは、家庭をはじめ地域社会の環境の重要さを示しているといえます。又、人的環境である人間関係の中で乳幼児が愛に包まれた安らぎと共に、快い体験がどれほど多くあったかが、心を持つ人間としての育ちには不可欠なものなのです。

今、豊かさの時代といわれる機械文明の中にあっても、育ちを便利さの機械にゆだね合理性で片づけるわけにはいかないと思います。「子守ロボット」ではいけないのです。人間としての心の育ちは、心と心を結びつける実践によってのみ可能であると思うのです。

心は心でしか育たないのです。

―あ～したてんきになあれ―

子どもたちにとっては身近かな家族、殊に母親にまさるものはないのです。母親の肌に遊んだ安らぎの日々の想いは、子どもの育ちにとって至上のものなのです。にも拘らず「母親の育児不安」「育児ノイローゼ」「虐待」など耳にする昨今であります。子どもたち

のつぶらな瞳、そして心が洗われるような愛らしい微笑みに救われる喜びなど、母親たちと共感し合っていきたいものです。

心の優しさはその人の品格を生み、心の底からの感動はその人の瞳を輝かせ精神的豊かさを生むといわれます。

「愛」をベースにした保育の営みの中に、子どもたちの感動体験や、共感を大切にし、子どもの行動を認める待つ保育、快の保育の実践を目指したいものです。その中で子どもたちが十分　自己存在感・自己充実感を味えるものであることを望んで止みません。

何はともあれ、子どもたちの瞳の輝きや幸せを心から願い祈る私自身が、生ある限り人間としての豊かな感性を磨き、内面の成熟を求めつづける輝く瞳の持ち主でありたいと願っております。